

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリスト オス か み よ 、 なんぢは じゅうじ か に て し を
 神 爾 十 字 架 死
 ほ ろ ぼ し 、 と う ぞ く の た め に ら く え ん を ひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 ら き 、 け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ
 携 香 女 悲 慰
 め 、 し と に なんぢが ふ く か つ して 、 せ か 界
 使 徒 爾 復 活 世 界
 い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え
 大 憐 賜 傳
 さ せ た ま え り 。

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

し と と ひ と し く ど う ざ な る も の 、 ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠
 じ つ に し て し ん ち な る ハ リ ス ト ス の え き し ゃ 、 せ い
 實 神 智 役 者 聖
 な る し ん に え ら ば れ た る ふ え 、 ハ リ ス ト ス の あ い
 神 撰 笛 愛
 に み ち た る う つ わ 、 わ が く に の こう
 満 器 我 國 光
 し ょ お し ゃ 、 あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ
 照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾羊群爲及

ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
全世界爲生命賜うせい

さんしゃにいのりたまえ。
三者祈給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこおとせいしんにき
光榮父子おとせいしんき歸

す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの
爾は初我國於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
外來者知れども、ハリストスの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
光暖かきをながし、爾のて敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
屬神子爲あし、かれらにか神

みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ちによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】

いまもおいつうもよよにい、アミン
 今 何 時 世 世 に い、ア ミ ン
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた
 死 権 已 人 人 捕 能
 わず、けだしハリストスはくだりてそのち力
 蓋 降 力
 からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご
 敗 滅 給 地 獄
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ
 縛 預 言 者 同 心 喜
 こびてよぶ、きゆうせいしゅはしんにおる
 呼 救 世 主 信 居

ものにあられたり、しんじゃよ、ふく
 者 現 信者 復
 か つ して い で よ 。
 活 出

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行なう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讃榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き 毅 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第7調 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて ^{しゅうじん} 聴く ^{へいあん} べし、衆 人 に 平 安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の 神 にも、

司祭) ^{えいち} 睿 智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^{そのたみ} 主 は 其 民 に ^{ちから} 力 を ^{たま} 賜 い、^{しゅ} 主 は 其 民 に ^{へいあん} 平 安 の ^{ふく} 福 を ^{くだ} 降 さん、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ
其 民 平 安 福 降
さ さん。

誦經) ^{かみ} 神 の ^{しよし} 諸 子 よ、^{しゅ} 主 に ^{けん} 獻 ぜ よ、^{こうえい} 光 榮 と ^{そんき} 尊 貴 と を ^{しゅ} 主 に ^{けん} 獻 ぜ よ、

しゅ は その た み に ち か ら を た ま い 、 しゅ は
主 其 民 力 賜 主
その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く だ
其 民 平 安 福 降
さ さん。

誦經) ^{しゅ} 主 は 其 民 に ^{ちから} 力 を ^{たま} 賜 い、

しゅ は その た み に へ い あ ん の ふ う く う を く 降
主 其 民 平 安 福
だ さ さん。

【 ^{アポストロス} 使 徒 經 221 端 エフェス書 2 章 14 節～22 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがエフェス人^{じん たつ}に達^{しよ}する書^{よみ}の讀、

司祭) ^{つつし} 謹^きみて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟^{われら}よ、ハリストスは我等^{わへい}の和平^{ふたつ}なり、^{もの}二の者^{ひとつ}を^な一と爲し、^{へだて}隔の牆^{かき}を^{こぼ}毀ち、^{おのれ}己の身^みを以て^{もつ}仇^{あだ}を^{はい}廢し、^{おしえ}教^{もつ}を以て^{しよかい}諸誠^{りつぼう}の^{はい}律法^こを^{わへい}廢せり、^な是れ和平^{ふたつ}を爲して、^{もの}二の者^{もつ}を以て、^{おのれ}己^{おい}に於て、^{ひとつ}一^{あらた}の新^{ひと}なる人^{つく}を造り、^{またじゅうじか}又^{あだ}十字架^{ころ}にて^{これ}仇^{もつ}を殺し、^{ひとつ}此^みを以て、^{おい}一^{ふたつ}の身^{もの}に於て、^{かみ}二^{ふくわ}の者^{ため}を神^{かつきた}と復^{なんぢらとお}和^{もの}せしめん^{ちか}爲^{ちか}なり。且^{ちか}來^{ちか}りて、^{ちか}爾^{ちか}等^{ちか}遠^{ちか}き者^{ちか}及^{ちか}び近^{ちか}き者^{ちか}に和平^{ちか}を福^{ちか}音^{ちか}せり、^{ちか}蓋^{ちか}彼^{ちか}に由^{ちか}りて、^{ちか}我等^{ちか}二^{ちか}の者^{ちか}は、^{ちか}一^{ちか}の神^{ちか}に在^{ちか}りて、^{ちか}父^{ちか}に近^{ちか}づく^{ちか}を得^{ちか}るなり。故^{ちか}に^{ちか}爾^{ちか}等^{ちか}既^{ちか}に異^{ちか}民^{ちか}、^{ちか}或^{ちか}は他^{ちか}邦^{ちか}の人^{ちか}たらず、^{ちか}乃^{ちか}諸^{ちか}聖^{ちか}徒^{ちか}の同^{ちか}邦^{ちか}の人^{ちか}、^{ちか}神^{ちか}の家^{ちか}屬^{ちか}なり、^{ちか}爾^{ちか}等^{ちか}は諸^{ちか}使^{ちか}徒^{ちか}と諸^{ちか}預^{ちか}言^{ちか}者^{ちか}との^{ちか}基^{ちか}に建^{ちか}てられ^{ちか}たり、^{ちか}イイスス^{ちか}・ハリストス^{ちか}は自^{ちか}ら其^{ちか}隅^{ちか}石^{ちか}なり。此^{ちか}の上^{ちか}に全^{ちか}屋^{ちか}は組^{ちか}み立^{ちか}てられ、^{ちか}次第^{ちか}に築^{ちか}きて、^{ちか}主^{ちか}に於^{ちか}ける^{ちか}聖^{ちか}殿^{ちか}と爲^{ちか}る、^{ちか}此^{ちか}の上^{ちか}に^{ちか}爾^{ちか}等^{ちか}も、^{ちか}神^{ちか}に由^{ちか}りて、^{ちか}神^{ちか}の居^{ちか}處^{ちか}として、^{ちか}共^{ちか}に建^{ちか}てらる^{ちか}るなり。

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にあって、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にあって共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。

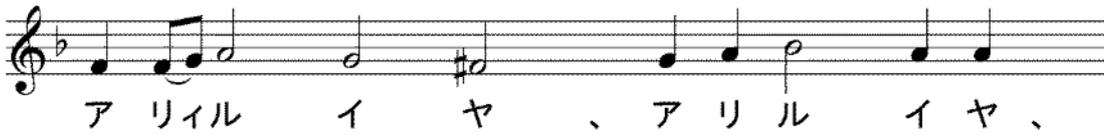
【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) ^{なんぢ} 爾^{へいあん}に平安、

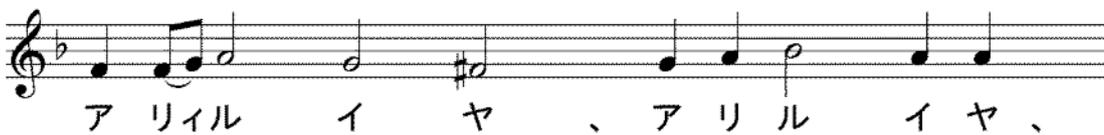
誦經) ^{なんぢ} 爾^{しん}の神^{しん}にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

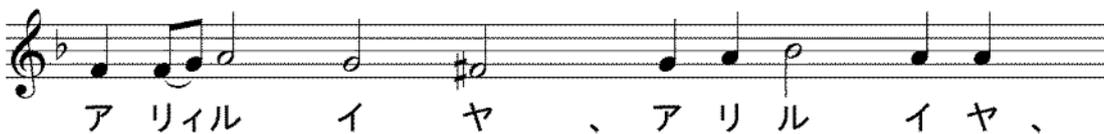
誦經) アリルイヤ、



誦經) ^{しじょうしゃ} 至 上 者よ、^{しゅ さんえい} 主を讚 榮し、^{なんぢ な うた び かな} 爾 の名に歌 うは美なる哉、



誦經) ^{なんぢ あわれみ あさ の なんぢ まこと よ の び かな} 爾 の 憐 を朝に宣べ、爾 の 眞 を夜に宣ぶるは美なる哉、



司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主 宰よ、我が 心 に神を知る智慧の 浄 き光 を輝 かし、我が思念

^{め ひら なんと ふくいん おしえ さと たま わ うち なんと ふく いましめ} の目を啓きて、爾 が福音の 教 を悟らしめ給え、我が衷に 爾 の福たる 誠 を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんと よろこ ところ} 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉 體の慾を踏み、凡そ 爾 の喜ぶ 所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ 行 いて、属 神の生活 を過ぐるを致させ給え、蓋 ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんと わげん ちち しせいしぜん} 爾 は我が 靈 と 體 との光 照なり、我等 爾 と 爾 の無原の父と至聖至善にし

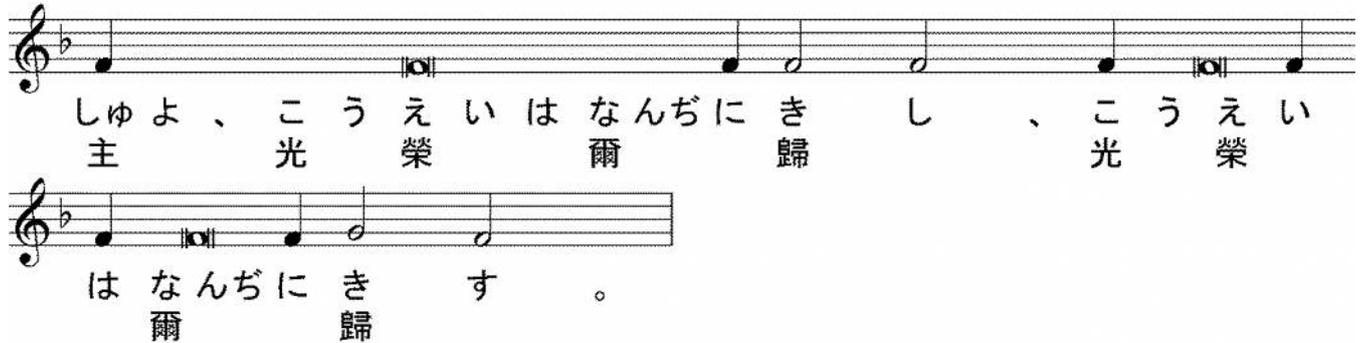
^{いのち ほどこ なんと しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施 す 爾 の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音 經 ルカ福音書 39 端 8 章 41~56 節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イアイルと名づくる人にして、會堂の宰たる者、來りてイ

イスの足下に俯伏し、其家に入らんことを求めたり、蓋彼に獨の女、年約十

二の者ありて、今死せんとせり。彼が行く時、民之に擁し逼れり。十二年血漏を患う

る婦、醫師の爲に其悉くの所有を費したれども、一人にも痊さるるを得ざりし者は、

あとより就きて、彼の衣の裾に捫りしに、其血漏直に止れり。イスス曰えり、誰か

我に捫りたる。衆の認めざる時、ペトル及び彼と偕に在りし者曰えり、夫子、民爾

を繞りて擁し逼るに、爾は誰か我に捫りたると謂うか。然れどもイスス曰えり、我に捫

りし者あり、蓋我能の我より出でしを覺えたり。婦は自ら隠す能わざるを見て、

戦きて來り、彼の前に俯伏して、彼に捫りし故、又如何にして立に愈されしを、

彼に衆民の前に告げたり。彼は之に謂えり、女よ、心を安んぜよ、爾の信は爾

を救えり、安然として往け。彼が尚言う時、會堂の宰の家より人來りて曰く、爾

の女已に死せり、師を煩わす勿れ。イスス之を聞きて、宰に答へて曰えり、懼るる勿

れ、惟信ぜよ、彼は救はれん。家に來りて、ペトル、イオアン、イアコフ、及び少女の父

母の外、誰にも入ることを許さざりき。衆人爲に哭き哀めるに、彼曰へり、哭く勿れ、

彼は死せしに非ず、乃寝ぬるなり。人人其死せしを知りて、彼を晒えり。彼衆を

そと いだ そのて と よ い しょうぢよ お そのしんかえ ただち お
外に出して、其手を執りて、呼びて曰えり、少女、起きよ。其神返りて、直に起きた

かれ これ しょく あた めい そのふ ぼおどろ かれら いまし おこな
り、彼は之に食を與えんことを命ぜり。其父母駭きたり、イエス彼等に戒めて、行

こと ひと つ なか
われし事を人に告ぐる勿らしめたり。

(比較用 口語訳) そこに、ヤイロという名の人 came。この人は会堂司であった。イエスの足もとにひれ伏して、自分の家においでくださるようにと、しきりに願った。彼に十二歳ばかりになるひとり娘があったが、死にかけていた。ところが、イエスが出て行かれる途中、群衆が押し迫ってきた。ここに、十二年間も長血をわずらっていて、医者のために自分の身代をみな使い果してしまっていたが、だれにもなおしてもらえなかった女がいた。この女がうしろから近寄ってみ衣のふさにさわったところ、その長血がたちまち止まってしまった。イエスは言われた、「わたしにさわったのは、だれか」。人々はみな自分ではないと言ったので、ペテロが「先生、群衆があなたを取り囲んで、ひしめき合っているのです」と答えた。しかしイエスは言われた、「だれかがわたしにさわった。力がわたしから出て行ったのを感じたのだ」。女は隠しきれないのを知って、震えながら進み出て、みまえにひれ伏し、イエスにさわった訳と、さわるとたちまちなおったこととを、みんなの前で話した。そこでイエスが女に言われた、「娘よ、あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」。イエスがまだ話しておられるうちに、会堂司の家から人がきて、「お嬢さんはなくなられました。この上、先生を煩わすには及びません」と言った。しかしイエスはこれを聞いて会堂司にむかって言われた、「恐れることはない。ただ信じなさい。娘は助かるのだ」。それから家にはいられるとき、ペテロ、ヨハネ、ヤコブおよびその子の父母のほかは、だれも一緒にはいって来ることをお許しにならなかった。人々はみな、娘のために泣き悲しんでいた。イエスは言われた、「泣くな、娘は死んだのではない。眠っているだけである」。人々は娘が死んだことを知っていたので、イエスをあざ笑った。イエスは娘の手を取って、呼びかけて言われた、「娘よ、起きなさい」。するとその霊がもどってきて、娘は即座に立ち上がった。イエスは何か食べ物を与えるように、さしずをされた。両親は驚いてしまった。イエスはこの出来事をだれにも話さないようにと、彼らに命じられた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀3 (金口イオアン) へ